The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The musicking of Malay folksongs in Ulu Tembeling and its applicative implications on music education
Author(s)	Chan, Cheong Jan
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43175
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【19】

氏　　名	CHAN, CHEONG JAN（チャン チェオン ジェン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学 位 記 番 号	第　16683　号
学位授与年月日	平成14年3月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	The musicking of Malay folksongs in Ulu Tembeling and its applicative implications on music education ウルタンバリン・マレー民謡と音楽教育に対する応用的展望
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　山口　　修 （副査） 教　授　根岸　一美　　助教授　永田　　靖 佐賀大学文化教育学部教授　田中　健次

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、多民族国家マレーシアに生まれ育った華系の作曲家・音楽教育家・音楽学者という複合的な立場から、国が施策をすすめる「マレーシアの音楽」普及の問題に正面から批判的に取り組んで、近未来に向けた具体的方策を講じるための方法論を提示することを目的としている。そのため、多民族のなかでも国策として最重視されているマレー民族が育んできた音楽性を探る意図をもって、熱帯雨林の僻地ウルタンバリンでフィールドワークを積み重ねて民族音楽学的かつ文化人類学的な記述と分析をおこない、その膨大な量におよぶデータに基づいて、近代的な学校での音楽教育のあり方を論じたうえで、多元文化主義的なマレーシアにおいて未来の音楽文化が担う方向性を示すべき文化行政について提言する。

論文は三部構成、通し番号による全六章からなる。第一部「問題背景」（第一章「導入」および第二章「マレーシアの音楽的問題」）では、まず、現在のマレーシア政府が敷く近代西洋に偏重した音楽教育のあり方にたいして基本的な疑問を表明し、「真のマレー音楽とはなにか」「マレー民謡の価値はどこにあるのか」「マレー民謡をこれからどのように扱えばよいか」という三点を問題提起する。次に、これらの問に答えるための理論的準拠枠を「未来志向の応用音楽学理論」（山口修2000）および「音楽にかかわるあらゆる行為を包含したミュージッキング概念」（Christopher Small 1998）に求めることを述べる。

第二部「バンタル村におけるミュージッキング」（第三章「バンタル村のインドゥン」、第四章「バンタル村のタリアン・サバ」および第五章「バンタル村のミュージッキングにおける人間間相互作用」）では、静と動の対照的特徴を示しつつウルタンバリン地区に伝承されるふたつの表演芸術（performing arts）－草刈歌舞インドゥン indung および治療儀礼歌舞タリアン・サバ tarian saba－を例にして、これらが社会変化のなかでさらに伝承されるうえでの理論的根拠を探りあてるために、過去から現在まで表演芸術との関連で繰り広げられてきた人間の葛藤と、そこから具現化する表演様式を丹念に描き出す。

第三部「民謡ミュージッキングの将来」（第六章「現在のマレーシアにおいて民謡を伝承することの意義」および第七章「人為的脈絡変換」）では、第二部で仔細かつダイナミックに記述した伝統的な音楽舞踊伝承と音楽活動を活用しつつ、現代および未来のマレーシアの音楽教育に貢献する新しい理論として「脈絡変換 transcontextualisation」概念（山口1995）を応用することが検討される。すなわち、人間の相互作用を再評価した音楽教育や作品創作が望まれると結論づける。

（分量　本文英文282頁55,295words 付録等130頁　図版、採譜、用語集、参考文献、日本語・英語・マレー語長短要旨）

論文審査の結果の要旨

本論文は、地球規模で多大な影響を及ぼしてきた近代西洋音楽を相対的な準拠枠として位置づけるにとどめ、いわば周縁的な状況におかれた民間伝承の表演芸術に中心性を復権させることを目論んだ研究であり、世界的な規模で画一化の傾向がはげしい音楽の現代的状況と照らし合わせれば、まことに時宜を得た研究である。すなわち、いわば周縁的な脈絡に取り残された、もしくは、追い込まれた多くの「小さな」伝統がそれぞれの伝統を新しい社会のなかで活性化しようとあがいているからである。結果的に音楽教育学や作曲理論をも包含すべき総合的な音楽学を提唱するかたちをとる本論文は、論者の母国だけでなく、近隣の東南アジア諸国のみならず、アジア全般そして世界に向かって有効性を主張し得るものである。

ただし、本論文の短所もいくつか指摘できる。たとえば、既存の音楽や舞踊を綿密に記述することには成功してはいても、論者が意図する創造的側面での具体的な提案が説得力あるかたちでなされているとは認め難い。また、多元文化主義を標榜する国の音楽を問題にするうえで、事例が一民族に限定されていることには問題が残されているといわざるを得ない。

しかしながら、これらの短所は本論文に続くものとして補うことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。本論文は、社会との互恵関係を重視する応用音楽学的研究として従来の水準を超える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。